

# 「しあわせのようなもの」

1月29日（日）。日比谷図書館のホールで映画生活50年の記念上映会を企画し、150人近い方々が集ってくれた。上映作品は長編処女作『奈緒ちゃん』と最新作『パスカルズ～しあわせのようなもの～』。最新作はお披露目上映だったので、ドキドキだった。

「この場にいれてよかったです。言葉にするのは難しいぐらいグツときてしまいました。」

「メンバーの三木さんが旅立たれた悲しみというより、鳥になり飛んで行く映像で救われた気がしました。命はいつか終わるけど鳥のように自然に飛んで行くものと信じたいです。」

「汗はとばないが、鳥は飛ぶ。幸せな、自由な音楽ドキュメンタリー！」

「なぜかPascalsの皆さんの音を聴いていたら、小さかった奈緒ちゃんがゆりゆり、ふわりふわり♪と歩いている姿が見えたような気がしました。」

「『奈緒ちゃん』と『パスカルズ』全くちがってすごくよかった。何かつながっているのかなあ...。パスカルズみたいな音楽、初めて聴きました。自由で元始的で未来的だなあ。子どもっぽくて不思議で思索的でした。」

感想はいつもながら映画以上に豊かなイメージを語ってくれています。私の映画は作品そのものよりも感想の方が素晴らしい、と口の悪い仲間言うけど、本当にそうだ。映画が観た人の心の扉を開けて、イメージを引き出しているんだから、と自慢もしたいけど。

私は、映画というイメージのトンネルを掘る仕事をしただけで、トンネルを歩くのは、一人ひとりの観客だからね。映画は、観た人の中で映画に成って行くのだから...

『奈緒ちゃん』と『パスカルズ』の映画が、全然違うはずなのにとてもよく似ていると思う、と何人かに言われて、ちょっと嬉しかった。『奈緒ちゃん』で始まった私の映画創りは、長編だけでも二十本を越えて、それぞれの作品の内容もかなり多様だと思う。多様で多作。でも、言ってみれば、長い一本の映画を創っているという感じがあるようにも思う。

言えば、「いせ線」という線路をあっちゃこっちゃブレながら走り続けている感じかなあ...。仕事が遅いから、特急列車ではなく、鈍行列車だと思うけど、ゼーゼー言いながら走り続けて停車場に辿り着く。

一作一作そんな風な作品創りだ。

『奈緒ちゃん』という駅から走り始めた列車が今、『パスカルズ』という駅に着いたところ。長い一本の映画の途中駅なんだな...

今回の『パスカルズ』のサブタイトル「しあわせのようなもの」というフレーズは、実は『奈緒ちゃん』の前作の短編『をどらばをどれ』のラストコメントなんだ。信州の小さな村に伝わる“をどり念仏”を踊り終えた老夫婦が、村の道を歩くうしろ姿に語りかけるような言葉が欲しいと思い浮かんだ言葉が「しあわせのようなもの」。

三十年近く経って新作『パスカルズ』のサブタイトルにその同じフレーズが甦ってきたんだ。

「しあわせ」って何？と聞かれても、私には答えようがないけど、「しあわせのようなもの」を感じる映画を創りたいと思い続けて来たような気はする。もしかしたら、これまで創って来た映画の全てに「しあわせのようなもの」とサブタイトルを付けたかったようにも思うのだ。

長い一本の映画は、まだ終わらない。「しあわせのようなもの」を求める鈍行列車の旅は続きます。まだまだお付き合いください。

伊勢 真一